成り代わり真依は姉のために死にたい

トートロジー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

姉さんの足を引っ張っているのが誰なのか、僕だけが知っている。

だから決めた、貴方(僕)のために死ぬと。

だから歪んだ、貴方の記憶に残りたいと願った。

目次

愛ほど歪んだ呪いはない ―― 1
暗躍 ―― 4
彼女は盛大に嘘を吐く ―― 8
青春アミーゴ ―― 16

愛ほど歪んだ呪いはない

「あー、あー、ちゃんと撮れてるかな？」
しっかりと音声を記録できるように、鮮明な映像を残せるように、少し高めのカメラを買った。
今から僕はここに禪院真依という少女が、姉さんの妹が生きた印を残す。
「これは姉さんへの遺言です、それ以外の人がこの映像を開いてしまったら今すぐ閉じてください……じゃあ始めるよ」
僕は転生者だ
だから知ってる、故に知ってしまっている、姉さんの天与呪縛が不完全である理由を。
僕が死ねば姉さんは強くなれるのに、完全なフィジカルギフテッドになれるのに、僕はなかなか自分を殺すことが出来なかった。
大好きな姉さんの側に居たいと、そんな身分不相応な願いを抱いてしまったのだ。
「色々と言いたいことはあるけど」
でもそれもようやく決心がついた、今日ようやく両面宿儺が受肉した。
原作が始まったんだ。
姉さんのために死にたいけど、姉さんの側で生きていたい、そんな矛盾した思いを抱えるのももう終わり。
でも、僕は死んでも姉さんの中で生き続ける。
記憶の中に留まり続ける。
「まずは姉さんに一言」
そのために生きている頃の僕の映像を残す、姉さんに忘れてほしくないから。
姉さんの側で死ぬ、死に様をその目に焼き付けて欲しいから。
出来るだけ悲劇的に、出来るだけ喜劇的に、最後まで『純粋でお姉ちゃん思いの優しい真依ちゃん』を演じ続ける。
そうすれば、僕は貴方の記憶の片隅くらいには残れるでしょう？

「今までありがとう」
本当は打算まみれで貴方に好かれることばかり考えているというのに、貴方に嫌われてしまわないように仮面を被り続けているというのに。
でも、それでも好きなんです大好きなんです。
いつも呪霊に怯える僕の手を取ってくれた姉さんが、家の連中にバカにされても前を向き続けた姉さんが、この世のなにより大好きなんです。
「ずっとずっと僕は姉さんに救われてきた」
死ぬのはちょっぴり怖いけど、どうせ二度目の人生なんだ。
姉さんのために、僕のために、この命を使い果たす。
「大好きだよ、姉さん」
だからこれは、妹から姉への感動のメッセージなんかじゃない。

――愛という呪いのメッセージだ。

・・
・・・
・・・・
・・・・・
・・・・・・・

「よし、撮り終わった。後はこれをＵＳＢに移して保管しておくだけ。決意したとはいえ死ぬのはまだまだ先、渋谷事変が終わった後だし」
僕は積み重ね続けてきた。
同じ東京校に通って、隣の部屋に住み、毎日一緒に生きてきた。
姉さんの側にいるという楽しい楽しい日々を送ってきた、誰よりも姉さんの近くにいた。

姉妹とはいえ人間、相手のことを全部は理解できない。
だから確証は持てないけど、今この瞬間死んでもある程度は悲しんでくれるはず。
「でも、ただ悲しんでくれるだけじゃ嫌だ」
劇的に、貴方を守って貴方の側で貴方のために死にたい。
命を賭した縛りで形見代わりの呪具を作って、貴方に呪いの言葉をかけて、それでようやく最低な僕は死に至る。
もう姉さんの足を引っ張らなくて済むという満足と共に、この二度目の生を終わらせる。
「……姉さん、こんな最低な僕をどうか許さないで」
出てきそうな涙を気合で堪える、僕に泣く資格なんかあるはずない。
「泣かない、僕は泣かない。後悔も未練も全部全部抑えつける」
何回か、なんでここまでして姉のために死のうとしているのか考えたことがある。
でも毎回たどり着く結論はいつも一緒。
禪院真依は禪院真希がとてもとても大好きだから、ただそれだけなんだ。

暗躍

無から有を生み出す。
その現象を人類は有史以来あらゆる方法を使って追い求めてきた。
ある学者は錬金術に夢を見て、ある坊主は呪霊と契約し、ある王は国中から有識者を集めた。
されどその術は見つからず、現代社会において無から有の生成は基本的に不可能だとされている。
「そんな夢のある術式も、呪力量が乏しい僕には扱いきれないのが現状」
転生者故か、はたまた単なる偶然か、ここに存在するはずだった本物の禪院真依よりは呪力量は少し多い。
けれどそれは微々たるものだ、刀を生み出したりバイクを生み出したり出来る程じゃない。
そんな僕は準二級術師、恐らくこれで頭打ちだろう。
余程とんでもない何かが起こらない限りこれ以上の昇格はあり得ない。
「ま、どうせ後一年も立たずに死ぬんだから昇給なんて考えるだけ無駄かな」
死ぬ、僕は死ぬ。
それは確定事項だけれどどう死ぬのかはまだ決めていない。
プランは幾つか用意してあるけど、一番確実で危険性のないのは何もしないこと。
少年漫画のキャラクターとしては失格な立ち回りだけど、準二級の中でも下の方の実力を持つ僕に出来ることは多くない。
「渋谷事変を生き残って扇に切られる。そして命を賭けた縛りで呪具を生成して姉さんに託す。これが最善、これが一番確実性の高い計画」
でもこの計画にはいくつかの懸念がある。
一つは渋谷事変と死滅回遊で姉さんが死んでしまう可能性があること、もう一つは五条悟封印によってこの世界がバットエンドを迎え

てしまうかもしれないこと。
前者については心配はしてるけどこのプランで僕に出来ることは少ない、せいぜいフィジギフの肉体強度を信じることくらいだ。
出来ることなら渋谷事変の間は姉さんを軟禁しておきたいけど、僕と姉さんじゃ姉さんの方が強いしそんなことしたら嫌われてしまう。
そして後者。
「僕は姉さんが直哉呪霊を倒すところまでしか知らないけど、少年漫画なんだしハッピーエンドとまではいかないまでも羂索の宿儺も死ぬエンドにはなるはず」
そして完全なフィジカルギフテッドとなった姉さんならそんなエンドまで生き抜けると思うし、その先も生きて幸せになってくれると思うという単なる予測だ。
でも僕は預言者でもなければ未来予知ができる超能力者でもない、自分が死んだ後のことを予測するなんて不可能に近いんだ。
だからせめてもの考えを張り巡らせる。
「これをプランA、原作に忠実に動く作戦とすると……プランBなら『僕の死に様』を決められなくなること以外は姉さんの安全を確保出来るし最適なんだよね……原作とは違って東京校に通ってるし勝算はある……」
「お客さん、さっきからブツブツとどうしたんですか？」
「あ、声に出てました？」
タクシーの運転手が僕に問いかける。
そう、僕はタクシーで山の麓まで移動していたのだ、とある目的の為に。
バスは生憎本数が少なく時間も合わないことからやむを得ずタクシーを使っているのだ。
「いや、声が小さくて聞こえませんでしたけど、あまりに長く呟いていたんでちょいと気になってしまって」
「すいません、癖なんですよコレ。頭の中で考えてるつもりでもたまに声に出てしまう」
「変わってらっしゃるんですねぇ。しかしお客さん、どうしてあんな

山の中へ？あんなとこ何もないでしょう？観光地でもないですし」
よくいるお喋りな運転手、だけど残念ながら正直に答えるわけにはいかない。
京都東京どちらの高専でも吐いている嘘をここでも吐く。
「ダムがあるでしょう？」
「ダム？」
「そう、ダム。僕好きなんですよ彼処が。だから最近学校の合間を見計らって全国のダム巡りをしたりしてるんです」
「へー、そりゃまたいい趣味してますね」
もちろん嘘だ、ダムになんて微塵も興味はない。
もしも姉さんがいるならコンクリートのダムも光り輝いて見えるだろうが、生憎姉さんは高専だ。
僕の目的はメカ丸、その本名は与幸吉。
高専に提出されている書類に記された住所に彼がいないことは確認済み、そして馴染みの情報屋に依頼して究極メカ丸を作るのに必要な資材を運び込んだりしている業者を調べた。
結果、ここが浮かび上がってきた。
僕は今から彼に会いにいく、ここでの会話次第で僕が『プランC』を選択するかどうかが決まる。
なんなら『プランD』を視野に入れる必要が出てくるかもしれない。
「着きましたよ」
「あ、もうですか？」
料金を払いタクシーを降りる。
この山のダムにあの子はいる、僕の友人である与幸吉がいるんだ。
そう、僕は彼と友人だ。
案外話があったりするのだ、と言っても話す内容は呪術関連ではなくくだらない事ばかりだが。
「よし、覚悟は決めた。会いに行こう」
ねぇメカ丸、生身の貴方に会って僕は何を思うんだろう。
改めて友情を感じるのか、はたまた何も感じないのか。
「この前、いつか本当のメカ丸に会いにいくって言ってたよね」

今、行くよ。

彼女は盛大に嘘を吐く

「確かにメカ丸らしき呪力を感じるね、うっすらとだけと」
険しい山道を登るのは、術師にとってそう難しいことではない。
体を呪力強化すれば良いからだ、呪力で身を覆い身体能力を強化し道を進めば良いだけだからだ。
「でもそれは並以上の呪力量がある術師だけ」
確かに身体強化に必要とする呪力はそこまで多くない、でも少しづつだが消費はするのだ。
乏しい呪力量しか持たない僕は余計なところで呪力を使っている暇などないのだ。
相変わらずブツブツと独り言を喋りながら僕はダムまでの道を歩いていく。
呪力以前に鍛えられた術師としての身体能力があればそこまで苦ではない、たまに転びそうにはなるけど。
「あ、見えてきた。さて、肝心の幸吉の場所は……」
呪力を探す、彼の呪力を。
集中し、神経を研ぎ澄ませると次第にそれは見えてきた。
「管理室の……地下か」
いよいよ幸吉に対面すると思うと、少し緊張してくる。
僕が知っている彼についての情報はあまり多くない、原作からの情報とメカ丸を通して得た情報は彼という人間を形作るピースの欠片でしかない。
細かな性格も、肉体に現れる普段の癖も、声すら知らないんだ。
「そう考えると、緊張というよりワクワクもしてくるね」
我ながら呑気なものだと思う、今日ここで『プランC』が選択出来るかどうかが決まるというのに。

僕が考えたプランは幾つかあるけど、実は何を選択するかはまだ決めていないんだ。
どれも不確定要素がある上に、仕込みの段階まで辿り着いてないプランも多いからだ。
一番確実で危険性のない計画をプランＡとすると、プランＣは超絶に危険で確実性のない計画。
「だけど、プランＣなら幸吉なら生き延びれる可能性が高い。まあ、五条悟の庇護下に上手く入り込めれば の話だけど」
そう、プランＣとは究極メカ丸試作０号と真人との戦いのドサクサにまぎれて結界内から幸吉を逃す計画。
正直真人と羂索相手に僕なんかが立ち向かえるわけない、実力的にも精神的にも。
だからこそ正面戦闘を行わずになんとか幸吉を逃がせないかとの考えた結果、僕はとある策に行き着いた。
その策を遂行するために必要な術師への渡りをつけた、金も用意した。
後残る計画への障害はただ一つ、幸吉だけだ。
彼を上手く説得できればプランＣを行うことは僕の中で決定される。
「幸吉が助かれば五条悟も封印されないし、死滅回遊も起こらなくなる。姉さんが死ぬ危険性を極限まで減らせる」
ネックなのは僕の悲劇的な死に様を自分で作り出さなければいけないという点だが、それくらいのデメリットは受け入れよう。
死滅回遊が行われないということは一瞬でも長く姉さんと一緒にいれること。
足を引っ張っているという罪悪感と早く死なねばという義務感はあるものの、クズな僕はどうしても喜んでしまうのだ。
姉さんと一緒に居られることが嬉しくて堪らないのだ。

△△△△△△△△△△△△△

与幸吉には生まれつき右腕と膝から下の肉体が存在せず、更には腰から下の感覚がない。
肌は常人のそれとは比べ物にならないほど脆く、全身の毛穴からは針で刺されたような痛みが神経を走る。
だがその代償として彼は実力より数段上の呪力出力と広大な術式範囲を与えられた。
通常の縛りとは比べ物にならない効果、生まれながらにして強制的に結ばされた縛り、いったい誰がその祝福と呪いを授けたのか。
古今東西の術師はそれを研究し、その真実を解明せんと意気込んだ。
だがそれは誰にも分からず、ありとあらゆる術師が首をかしげた。
あまりに難解で難題な研究課題に、次第に大昔の術師は諦めを感じていた。
『あぁ、もはやこれは人の手に余る。まるで神の所業、天が与えた呪縛ではないか』
誰が言ったかその言葉。
いつしか先天的に結ばれた縛りであるそれは、天与呪縛と呼ばれるようになった。
「呪力反応……！」
天によって悲劇的呪縛を与えられし彼はとあるダムの地下にいた。
高専に登録してある住所は少し前に夏油と真人契約した時に引き払ったのだ。
あの化け物達を倒す力がいると、より大きなメカを作るために引っ越したのだ。
究極メカ丸試作０号はまだ完成していない、多くのメカ丸によって制作しているもののまだまだ完成への道は遠い。
大きすぎるから時間がかかるのは仕方がないと思いつつ、少し焦りも感じ始めている。
そんな中、友人である禪院真依の呪力を上から感じたのだ。

「俺の居場所を見つけ出したのか？いや、そういえば確かダム巡りが趣味だと言っていたような……？」
思案に耽っていると、カンカンと階段を降りる音がしてきた。
念のため作り出したメカ丸達の起動準備をする。
与幸吉の懸念は『禪院真依が内通者である俺を捉えようとしているのではないか？』と『呪力だけ似せた真人じゃないか？』の二つ。
前者は準二級の真依に自分が倒せるわけがないと早々に思考の外へ追い出した。
だが後者の可能性は捨てきれない、肉体を自由に変形させることができる彼ならばそのような身技も可能ではないかと疑っているのだ。
だがもう思考する時間はない。
「やあ、幸吉。逢いに来たよ」
メカ丸越しでしか知らない少女が、そこにいた。
「……本物か？」
仮に真人だとしたら０号が完成していない今では勝てないし逃げれる算段もない、だがそれでも問うてみる。
既に契約の代わりに自分を治すという縛りを結んでいるからそれまで殺される心配はない、と思えるほど彼は楽観的ではなかった。
「勿論、なんなら証拠でも出そうか？幸吉と初めて出会った時の僕の黒歴史とか、チョコの代わりに電池あげた事件とかも詳細に話す？」
「いやいい、その雰囲気の喋り方はオマエしかいない」
「そりゃ良かった」
てっきり『本物とはなんのこと？』みたいな問いがあると思ったのだが不思議とそのまま会話は進行していた。
そこに若干の違和感を抱きつつも、真人では出せないであろう独特な雰囲気を確認して幸吉はホッとしていた。
「それで、何故この場所に？ダム巡りしてたら偶然……とは言わんだろうな」
「そんな言い訳も用意してたんだけどね、冥冥との取り引きも上手くいきそうだしここは本音で行こうか」
「冥冥？あの守銭奴に依頼できるだけの金……そうかオマエは株で儲

けていたな」
　真依が何を取り引きしようとしてるかは彼は知らないが、冥冥という術師はとにかく守銭奴で有名。
　尚且つその術式や依頼達成率から、取り引きしようとすればそれ相応の金が必要になるのだ。
「そう、まあ色々と株の方が上手くいってさ。それはいい、本題に入ろう。気になってるんでしょ？僕がどうやってここに来たのか、そしてなぜ来たのか」
「前者は冥冥への捜索依頼といったところか、後者は……見当もつかん」
「冥冥の方は半分正解、実際は冥冥経由で他の情報屋を紹介してもらったんだ。かなり高くついたけどね。そして目的、これは単純明快。取り引きをしに来たんだ」
　そう言い放つと真依はスタスタと幸吉の方へと歩み寄った。
　そしてジャブジャブとした彼が浸かる液体の前までたどり着くと、少し屈んだ。
「何故屈む」
「目線が同じになるでしょ？立ったままだと見下したような感じになっちゃう」
　いつものように整った顔でニコリと真依は微笑む、それはまるで聖母のような。
　実際に自らの両の目で見てみると、それは思った以上に幸吉のコンプレックスを刺激するものだった。
　友人相手にこのような感情を抱くのは醜い、彼はそう思いつつも彼女の整った容姿への嫉妬を抱かざるを得なかった。
「醜いな……」
「え？僕？スキンケアはちゃんとしてるし顔立ちはいい方だと思うけど」
「いや、俺のことだ。あろう事かせっかく会いに来てくれたオマエに対して嫉妬してしまった、その綺麗なツラにな。姿だけでなく心まで醜くなってしまったら終わりだろう」

つい、鬱屈とした本音が彼の口から漏れ出てしまう。
はっきり言って彼の対人コミュニケーション経験は多くない、普段メカ丸越しなのに加えて交友関係があまり広くはないのだ。
だがまあ、今の言葉が失言だったことくらいは幸吉にも理解できた。
「すまん、今のは――――――
「ははっ、僕に『そんなことない君は醜くないよ』なんて乙女ゲームモデルのラノベの主人公のような台詞を言わせるつもり？爛れた肌も醜い顔も呪霊で見慣れてるさ」
少し、いつもの口調と違うと感じながらも素直にその言葉を受け止める。
幸吉自身も呪霊ほど自らの容姿は劣っているとは思っていない、人の形を保っているだけマシだと自己肯定感を高めているのだ。
流石に真人を引き合いに出されたら一瞬で敗北宣言を出すが。
「まあ……それはそうだ」
「それに、僕は兄が中学の頃硫酸で顔を焼いてしまってね。それ以来ずっと見てきたから爛れには慣れてるんだ」
「兄？オマエに兄なんていたのか？」
そこで真依は一呼吸置いて、幸吉の目を見て話始める。
「２０１８年、１０月１９日。○△ダムにて君は真人に殺される」
「なッ…にを…」
真人、その名を真依が知るはずがない。
夏油に通じていない限り、呪霊の側についていない限り、死ぬはずがないと彼の脳みそは叫ぶ。
まさか、まさか目の前にいる少女は俺の同類なのか？と幸吉は動揺してした。
一年以上の付き合いはある親友、そんな彼女のまさかの発言はメカ丸達を起動させるのが遅れる程に彼を動じさせていた。
真人という単語に気を取られて彼は死ぬというワードにまで気を向けられない。
「しっかり僕の目を見て話を聞いて、僕が呪霊側に通じているように

見える？夏油がこんな落ちこぼれと取り引きすると思う？」
その言葉で、彼の思考は現実へと引き戻される。
そうだ、俺は真依の友人なのだ。こんなところで動じてどうする、というのが彼の思考。
ギリギリで冷静になることに成功したのだ、積み重ねてきた日々が彼の理性を保たせる。
気になることは山ほどあるが、まずはとにかく話を聞こうと続きを促す。
「続きを……話してくれ」
「よしきた、不思議に思ったことはなかった？僕が株でなんであれだけ稼げるのか。答えは簡単、急成長する企業を知っていたからだよ」
「知っていた？」
「うん、生まれる前から僕はなんの株を買えば儲かるのか全部知っていた」
「オマエは……何を……」
「幸吉が真人に負けたのも全部全部呪術総監部のデータベースからの情報で知っていた。君の名は呪術史に刻まれているからね、知っているのも当然だ」
また、彼女は一呼吸置く。
思考が追いつかない、知っていたとは何故だ。
未来予知でもしたのか？と一般人なら尋ねるだろうが幸吉は術師。
長期的な未来余予知が不可能だと言うことは呪術的に考えて当然だと知っている。
「なんてったって、僕は未来から来たんだから」
「未来だと？ターミネーターとでも言うつもりか？」
「悪いけど映画はあまり見ないんだ、単刀直入に言うと僕は前世の記憶というものを保持している」
「前世？」
「そう、僕の前世は――――

――未来の日本の術師だ」
今日一番の嘘が、炸裂する。

青春アミーゴ

そこからはもう怒涛の質問攻めだった。

『未来はどうなっているのか』『夏油達の目的はなんなのか』『京都校のみんなは生き残っているのか』『未来人ならば何故それを今俺にだけ明かしたのか』

当然の疑問の数々、もちろんそれに答えられるだけの用意はしてある。

そもそも僕が死んだのは２０２３年、そして今は２０１８年。

間の数年で変わった世界情勢を上手く脚色しながら、そこから推測できる未来像を出来るだけ矛盾のないように、ゆっくりゆっくり回答していった。

「確かに未来の情報の価値は計り知れない、あの魑魅魍魎の総監部共に伝わらないように隠してたのも納得が出来るが……」

「そーいうこと、例え恩師の五条悟にだって言えるわけがないよ。だって僕１２年前には既に五条家のクソガキにコンタクトとってたんだからね？夏油傑の末路を知っていて黙っていたなんて口が裂けても言えないさ」

頭を傾けながら唸るように幸吉は思考している、あまりに非常識で非科学的で非呪術的なことを僕が言ったんだから戸惑うのも当然だろう。

僕は五条悟という人間をあまりに知らなすぎる。

前世での原作知識なんて本人を前にすれば意味を成さない、紙に記された属性の羅列や過去など今を生きる人間相手に通じるものではないのだ。

人は大なり小なり隠し事をしている、性格を取り繕っている。

僕が『ノリよく明るく純粋で嫌味にない真衣ちゃん』というペルソナを被っているように、彼もまた『特級術師にして高専の教師であり生徒を導く者』という仮面を被っている。

そんな彼相手に「あ、夏油さん闇堕ちするの知ってたけど言わなかったよゴメンゴメン」なんて言えるはずがない、もしそんなことを

口に出そうものならその時こそ天上天下唯我独尊にして素を隠そうとしない彼の本音が見れるだろう。
その時僕がどうなるかなんて想像したくもない。
「前世が未来の術師、信じがたくはあるが嘘と言い切るにはあまりにオマエは知りすぎている」
「そうそう、だから信じてくれない？僕のこと」
これは、賭けだ。
常に天与呪縛、即ち先天的な『縛り』に囚われている彼ならばそこに行き着くはずだという賭け。
「……オマエは俺にとって初めて出来た友達だ、疑いたくはない。だが俺も術師だ、もちろんイタコのことも知っている」
「イタコ？……あぁ、つまり魂をあの世から引っ張り出してくるイタコが存在するってことは常にあの世に魂がなければおかしいってこと？」
「そうだ、しかもそれ以前に呪術的には輪廻転生は否定されている」
「まあそれに関しては僕がイレギュラー中のイレギュラーとしか言いようがないんだけど……どうしたら納得してもらえるか……」
わざとらしさが出ないように悩むフリをする。
僕らにはこの状況を打破する決定的で最高の策が一つある。
その存在は常に幸吉の身近にあった、気づけるはずだ。
浴槽のようなそれの中で、幸吉は沈黙を破り言葉を吐いた。
「それなら俺に一つ案がある」
「……それは？」
「縛りだ、これより少しの間互いに嘘をつけない縛りを結べばいい」
勝った。
にやけそうになるのを必死で抑え込み平常の顔を保つ。
もし幸吉が言い出さなくても僕が頃合いを見て提案していたが、疑われないためには彼から言い出してくれるのが一番。
「成る程ね、それはいい。でも少しの間ってのは曖昧すぎる。十分にしよう」
「十分か……真偽を問うだけならそれで充分か」

縛り、その存在に対する研究は多くの術師が行っている。
そして落ちこぼれとは言え禪院家の人間である僕は、歴代の禪院の人間の縛りに関する研究成果を閲覧することが出来るのだ。
もちろん生物学上の父親である扇の許可は出なかったが、僕は現当主の直毘人にそこそこ気に入られているためそっちから許可が降りたのだ。
「よし、じゃあ『これより十分の間、禪院真依は与幸吉の問いに嘘偽りなく答えることを誓うよ』」
「言質は取った、縛りは結ばれただろう……こんな縛りを結んだ時点でオマエが嘘をついている可能性はこの上なく低いがそれでも一応聞く」
「なんなりと」
「――――オマエの前世は未来の術師か？」
もちろん僕の前世は単なる一般男子中学生だ、呪術になんて触れたことのない一般人だ。
未来のことなんて知るはずがないし、姉さんが直哉呪霊を倒した後のことも全く知れない。
だからこそ、こう答える。
「答えはＹＥＳだよ」
あり得ないほどに嘘、信じられない程に虚実、そこに一切のホントウは存在しない。
だが、だがこれにより僕はペナルティを受けることない。
何故なら僕の名前は禪院真依ではなく、■■・■■■だからだ。
「……わかった、信じよう。オマエは確かに未来人だ、疑って悪かった」
「謝る必要はないよ、誰だってあんなこと言われたら疑うのも当然だ」
幸吉はふぅと息を吐くと全身からダランと力を抜いた、緊張の糸が解けたようだ。
そんな幸吉を見ながら、僕は禪院で見た書物の内容を思い出していた。
縛りには一つ興味深い事実がある、それは縛りの内容は結んだ者の

認識によって左右されることだ。
今まで結ばれた事例には、名前の偽装によるペナルティからのすり抜けなども存在する。
そこで僕は今回の作戦を思いついたんだ。
禪院という家に帰属意識を感じることもなく、今世の親から愛情を注がれることもなく、未だに前世の記憶をイチイチ思い出す人間は本当に禪院真依なのかという疑いが始まりだった。
とんちのような作戦だが、実際に今までの縛りの歴史が今回の策が有用であることを証明している。
まあ、一度実験的に棘とこの縛りを結んだ時は少し悲しくなりはした。
未だに僕の自意識は『禪院真希の妹である禪院真依』ではなく『○○中学に通う男子である■■・■■■』であるということが証明されたのだから。
姉さんの妹ではないと、そう言われているような気がしたから。
「それじゃあこっからはこれからの事を話し合いたい、僕の目的は君の生存とそれによる五条悟への伝達……」
「その前に、少し聞いていいか……今回の件とは全く関係ないんだが」
「別にいいよ、何？」
少し気恥ずかしそうに、尚且つ重苦しそうに、幸吉は問いかけてきた。
こんな時になんだと思ったが、とりあえず続きを促す。
「オマエには感謝している。堅苦しいメカ状態の俺と友達になってくれた、京都校に頻繁に来ては俺とくだらない話をしてくれた、メカ丸越しでしか喋る勇気がない俺とも電話で話してくれた、三輪が好きだと言った時も恋愛相談に乗ってくれた。全部の時間が楽しかった。オマエのお陰で今まで一線を引いていた京都校の術師たちの距離が縮まっていくのを肌で感じる」
初めは打算ありきだった、五条悟に僕から直接羂索のことを伝える『プランB』ではあまりに総監部や五条か警戒されると踏んだ僕の打算だった。

幸吉が生き延びることで五条羂索関連をあちらに任せられるという打算だった。
でもいつからか、普通に話していた。
天与呪縛故に動けず、そのため映画がアニメを人より多く見ている幸吉の話は面白かった。
歓声もなかなかに合っていて、前世で友達としていたような感覚を味わえた。
メカ丸越しに電話で喋っている時も、なかなか新鮮な体験で面白かった。
「だからこそ、差を感じてしまう。美しく、明るく、多くの術師や窓に好かれるオマエはまるで太陽のようだ。それに比べると俺にあるのは強さだけ、それも中途半端な準一級。成長も見込めない」
過大評価だ、なんて言いたくなるのを抑えて彼の言葉を最後まで一言一句残さず聞いていく。
これが幸吉の本音だともう既に理解しているからだ。
「こんなことを聞くのは単なる俺の自己満足だろう、それは理解している。それでも聞かずにはいられない」
ただ、聞く。
聴き続ける。
「俺は……オマエの友達足り得ていたか……？」
嫉妬、劣等感、何もかもがぐちゃぐちゃに入り混じった言葉が彼の口から放たれる。
こんな感情を幸吉が抱えていたなんて、僕は全く知らないった。
なら、返す言葉はもう決まっている。
「楽しかったのは、僕もだ。今の僕を見てる幸吉からは信じられないだろうけど、前世は結構インドア派だったんだよ？」
一息に、全部出し切る。
「最初は打算だった、けど話が合うのも、君の話が面白いのも、君との会話が楽しかったのも全部本当だ。だから、今日こそははっきり言うよ」
しっかり目を見て、伝えたいことを全部全部言葉に乗せる。

「幸吉との時間は楽しかった、まだ会って一年少ししか経ってないけど、それでもあの思い出たちは嘘じゃない」
　これは縛りをすり抜けた嘘じゃない。
「僕は、幸吉の友達だ。僕らは友達だ」
　虚実じゃない。
「君がどう思おうと、君がどう思おうが僕は君のことを大切な友人だと思ってる」
　だからこそ、危険のあるプランを選択してまで生き延びて欲しいと願ったんだ。
「だからさ、一緒に真人から逃げようよ」
　その後僕は死んじゃうけど、君は五体満足で人生を生き始める。
「幸吉の心は、自分で思うほど醜くないし弱くないよ」
　むしろ僕よりずっとずっと強い。
　だから僕は君の幸せも願っている。
「……なんかちょっと恥ずかしいな。こんなこと本人の前で言うのは」
「本当に、オマエは眩しいな……『僕らは友達』か」
　幸吉は言葉を紡ぐ。
「やっぱりまだ差を感じる？」
「あぁ、少しな。だが」
「だが？」
「悪い気分じゃない」
　そう言った彼は、確かに気の抜けた笑みをしていた。